

白浜レスキューネットワーク通信 5月号
〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町 3137-8
TEL&FAX0739-43-8981
<http://www.aikis.or.jp/~fujiyabu/nrsv1.htm>
e-mail yabiumi@yahoo.co.jp

理事長 藤藪庸一

郵便振替 00920-6-85589 口座名：白浜レスキューネットワーク
紀陽銀行白浜支店普通預金 589389 口座名：NPO特定非営利活動法人
白浜レスキューネットワーク

自殺者救済活動

5月1日～5月31日

電話件数 〇件

保護件数 22件、24人(男性19、女性5人)

帰宅件数 11件、14人(男性9人、女性5人) 自主退所 1人(男性1人)

○2日、生活保護を受けている親子を保護。車で来られた。話をした末、帰ることになった。

○4日、三段から電話があり、男性を保護。共同生活に加わることになった。

○9日、三段から電話があり、男性を2名保護した。2人とも生活保護をもらって生活していた。一人は翌日帰宅し、一人は共同生活に加わることになった。

○10日以前から関わりのあった女性を保護した。生活保護をもらって生活しているが、金額を削るといわれて悩んでいた。問題を解決することができ、翌日帰宅した。

○同日、九州から親子3人で相談に来られた。生活保護をもらって生活していた。話し合いの結果戻ることになった。

○11日九州から家を飛び出してきた20代の男性を保護した。当面の間共同生活に加わることになった。

○同日、交番から電話があり、20代の女性を保護した。仕事をやめたことを親に話せずにいた。翌日帰る決心をした。

○14日三段から電話があり、男性を保護した。猫と一緒にだった。共同生活に加わることになった。

○同日広島から車で来た男性を保護した。日、いなくなった。後日連絡が入った。

○15日関東から電話があり、男性を保護した。共同生活に加わることになった。

○同日、大阪から男性を保護した。翌日友人宅に帰ることができた。

○17日、三段から電話があり、女性を保護した。家族のことで悩んでいた。19日家族と連絡することができ帰宅した。

○18日、東京から来た男性を保護した。共同生活に加わることになった。

○19日、三段から電話があり、女性を保護した。その日のうちに帰宅した。

○22日、三段から電話があり、男性を保護した。その日のうちに帰宅した。

○23日、パトロール中に男性を保護した。共同生活に加わることになった。

○同日夜、三段から電話があり、男性を保護した。捜索願が出ていることもあり、警察で家族を待つことになった。

○29日、三段から電話があり、男性を保護した。共同生活に加わることになった。

○31日、三段から電話があり、男性を保護した。共同生活に加わることになった。

○同日、白浜駅から電話があり、男性を保護した。共同生活に加わることになった。

生活自立支援活動

5月1日～5月31日

滞在者数 16人(男性16人)

自立 2人(男性2人)

○まちなかキッチンの配達担当として働いている男性は、GW中に自分の残してきた荷物を取りに戻ることができた。

○焼肉屋で働いていた男性は、続けてまちなかキッチンの副菜の調理や配達を頑張っている。

○糖尿病で教育入院をしていた男性は2日に無事退院することができた。以前住んでいた場所での生活保護が正式に切られ、こちらで再度申

請の手続きをしている。動けるときとそうでない時の差が激しく、糖尿病からの狭心症の悪化を危惧している。

○バスの運転手として働いている男性は毎朝早くから頑張っている。毎日夜お弁当をつくって持っていく。

○糖尿病で目が不自由になってしまっている男性は、目の手術をすることができた。まだ入院中だが経過は良好だ。

○先月保護された20代の男性は、皿洗いの仕事を頑張っている。どうしても仕事がないことがあるのでプールの監視委員の面接に行った。今は結果待ちだ。

○4日に保護された男性は、就職することができ寮に移った。当面食事は一緒にしている。

○9日に保護された男性は、70代だが、早くも仕事を見つけることができた。ホテルの掃除を頑張っている。

○猫と一緒に保護された男性は、住民票など行政的な手続きを行っている。それが住めば就職活動することができる。

○関東から来た男性は、以前の職場の上司が来て話をしてくださった。退職の手続きを済ませ、再就職することができた。ホテルの皿洗いについている。

○九州からきた20代の男性は、家族が来て話をすることができた。しばらくここに滞在し、今後のことを考えることになった。まちなかキッチンに入っている。

○東京からきた男性は、就職活動の傍らまちなかキッチンのお手伝いに入っている。

○パトロール中に保護された男性は、作業を手伝いながら今後のことを考えている。

自殺予防活動

・放課後クラブ・コペルくん

今月子どもたちは、修学旅行やキャンプに出掛けた。お土産を持って帰ってきてくれた子どもいた。

全体として人数は少なめだが、濃いかかわりをすることができた。家庭の必要に応じて活動することができればと思う。

・相談電話

2、9、16、23、30日、毎週休まず行なった。7日以降は電話件数が増えていたので、相談員の協力に助けられた。

・シルクスクリーン事業

理事長の講演の際に販売することができた。夏に向けて販売ルートを確定していくことができればと思っている。

・まちなかキッチン

GW中休業し、まちなかキッチンの調理場にオープンを入れ、雨除けの屋根を取り付けた。新しいお弁当箱を購入し、井ものにも挑戦している。

・NHKプロフェッショナル仕事の流儀反響

5月7日10時からNHKプロフェッショナル仕事の流儀とう番組で理事長が取り上げられた。

放送中から電話が鳴り始め、2週間ほぼ一日中電話が鳴り続けた。そのほとんどが相談電話だった。今月の保護した人数も過去最高となった。その中にもテレビを見てこられた方が多かった。

これだけの人が生きづらさを抱えている現実に圧倒された。生活保護をもらって生活している人が多く、生活保護制度についてまた考えることができた。

物資の支援や、寄付金もたくさんいただいた。

・今後の講演予定

6月5日(火)高松シオン教会で講演

6月16日(土)修学院フォーラムで講演

6月22日(金)日本キリスト教社会福祉学会53回大会で講演

6月30日(土)和歌山いのちの電話公開セミナーで講演

白浜レスキューネットワーク通信4月号
〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町3137-8
TEL&FAX0739-43-8981

<http://www.aikis.or.jp/~fujiyabu/nrsv1.htm>

e-mail yabiumi@yahoo.co.jp

理事長 藤藪庸一

郵便振替 00920-6-85589 口座名：白浜レスキューネットワーク
紀陽銀行白浜支店普通預金 589389 口座名：NPO特定非営利活動法人
白浜レスキューネットワーク

自殺者救済活動

4月1日～4月30日

電話件数 187件

保護件数 8件、9人(男性8、女性1人)

帰宅件数 6件、7人 (男性6人、女性1人)

- 1日、先月保護した男性が帰宅した。
- 4日、大阪に住む夫婦から電話を受け、翌日保護。話を聞き共同生活をしないかと話したが、禁酒禁煙であることや夫婦一緒の部屋に泊まることが難しいことが引っ掛かり、そのまま元いたところへ戻ることになった。
- 5日深夜、警察から電話があり翌日男性保護、相談後、数時間で帰宅する決心がついた。
- 6日、以前から関わりのあった男性を保護した。駅員や警察などにもお世話になる形になってしまった。翌日知人を訪ねていくこととなり、駅まで送った。
- 7日朝、三段から電話があり、男性を保護した。3日間歩き続けてきた。共同生活に加わることになった。
- 7日昼、三段から電話があり、男性保護。相談に乗り、帰る決心がついた。すぐ帰宅。
- 13日、以前から関わりのあった男性が糖尿病が悪化し目が見えにくくなり、仕事を辞めざる負えなくなり助けを求めて電話をしてきた。○21日歩いて旅をしているという男性を保護した。24日帰宅。
- 24日三段壁から電話があり、男性を保護した。共同生活に加わることになった。
- 27日、多重債務をなくす会の弘中さんから紹介で男性を保護。共同生活に加わることになった。

生活自立支援活動

4月1日～4月30日

滞在者数 8人(男性8人)

自立 7人(男性5人、女性2人)

自主退所 1件、1名(男性1人)

- 同日、まちなかキッチンで調理を担当していた男性が、元いたホテルの寮に移った。
- 支援学校のバスの運転手になった男性は今月頭から出勤している。朝早く長距離だが、良く頑張っている。
- 10日、母娘の親子が、大坂へ自立を果たした。仕事も住まいも無事に見つかり、送り出すことが出来た。ここからの歩みのために祈っている。
- 6日、長年ここで共同生活をしてきた男性が近くのアパートに移った。夕食は食べに来るようにと声をかけている。
- 同日警備会社で働いている男性もアパートを契約し、自立を果たした。
- 歩いて白浜まで来た男性は就職活動を始め面接の日程も決まっていたが、17日、自転車に乗ったまま帰って来なかった。
- 20日、今月保護された男性が検査のため、病院を受診した。今後、手術を受けて、視力の回復に期待したい。
- 23日、先月保護された糖尿病を患っている男性がはまゆう病院に教育入院した。
- 30日トレーラーの運転手をしている男性がアパートを契約、自立を果たした。
- 30日、スタッフとしてNPOの活動に従事している男性がアパートを契約した。これからは通いで働きに携わることになった。
- まちなかキッチンで配送担当として働いている男性は、キッチンの中でも中心に引っ張っている。安定感があり、作業もスムーズになっ

てきた。

○以前焼肉屋をしていたことのある男性は、続けて、まちなかキッチンの配達や、調理、皿洗い等を手伝っている。料理の腕も効率もあがってきた。

○今月保護した男性は、職安に行くが、なかなか仕事が見つからない。まちなかキッチンを手伝いつつ、今後を考えていく。

○アパートの管理人として働いている男性は、夕方から夜まで仕事に通っている。

○弘中さんからの紹介で保護した男性は、徐々に共同生活になじんできた。職安に行き、すぐに仕事が見つかった。ホテルの皿洗いをはじめた。

自殺予防活動

・放課後クラブ・コペルくん

4月に入り、皆一つ上の学年にあがった。「自分は最高額年だ」と誇らしげな6年生。小学校で唯一2クラスある5年生はクラス替えの結果に盛り上がっていた。担任の先生が変わり、宿題の方法も変わると今まで宿題が嫌いだっただ子が、集中して取り組めるようになった。毎回日記の裏に、先生の日記を印刷しているこまめな先生がいることに驚いた。

新しく通い始めた子も、新一年生もおおり、これからの関わりを楽しみにしている。

・相談電話

4、11、18、25日、毎週休まず行なった。継続して2人の相談員の方が来られている。この時間をより活用していければと思う。

・まちなかキッチン



4月から新体制になった。4月の1週目は今までにないほど売り上げが伸びた。地域にも徐々に受け入れてもらっている。調理人が交代したことで、レシピも増え、新しいメニューにも挑戦している。調理、配送、片づけ、すべての仕事の効率も上がり、雰囲気も良くなった。

共同生活者の中で、就職活動中の者などもその合間に作業に加わっている。今後も職業訓練的な意味合いも込めて発展していければと思う。

・NHK プロフェッショナルショナル～仕事の流儀～

5月7日(月)夜10時～当NPO理事長が番組に取り上げられる。1月初めからの取材がどのような番組に完成したのか楽しみである。

・今後の講演予定

5月19日(土)、20日(日)泉佐野で講演

6月5日(火)高松シオン教会で講演

6月16日(土)修学院フォーラムで講演

6月22日(金)日本キリスト教社会福祉学会53回大会で講演

6月30日(土)和歌山いのちの電話公開セミナーで講演

生きる希望をみいだす支援とは

私たちは1979年からの33年間の活動を通して1206名を超える自殺企図者と関わってきた。ここ13年でも保護した自殺企図者は534名を超える。その内、うつ病、統合失調症などの病を抱えている人々は比較的早く退所する。心配して探し回っている家族や知人がいるケースが多いからだ。残って自立を目指すのは戻るところのない人たちである。彼らを自立に導き社会に戻すために例外なく問題になったのは、彼らが生きてきた背景だった。幼少期から義務教育期間が終わるまでの家庭環境や教育環境での劣等感。親がいない、貧しかった、勉強が苦手、人間関係で悩むことが多かった、学校やクラス、社会に馴染めない自分を感じてきたなど様々だ。そして、このような劣等感はあるを生み、性格を歪め、欠落した部分を残していた。また、義務教育期間だけではない、その後も、思うように生きられない、こんなはずじゃなかったという経験は、落胆や失望に変わり、自分の価値を見失い自己憐憫に陥る。リストラと何度も失敗する就職活動で「いない」と言われ続けた人は、自信を失い、人を信じられなくなり、こちらも愛し辛い精神状態になっていることが多い。ここに欠落だけでなく心に傷を負っていく現実がある。

仕事さえあれば人生をやり直せると思っている彼らの、この欠落したもののや心の傷を見落とし、私は何度も自立させることに失敗した。仕事に就き収入を得られても、その仕事が続かない。給料をもらったその足で姿を消す。しんどいことや困難は立ち向かうよりも避ける。失敗した時は自分の非を認め謝罪するなど解決に向けた動きがとれず、黙ってやり過ごそうとする。何らかの誤解を招いても、理解されないのは、全部その相手が分かってくれないせいだと判断する。私たちの活動は、保護した後、自立させるために、過去を振り返らせ、過ちや失敗を繰り返させないために、彼らの生き方を変える、もしくは何らかの感化を与え続けなければならなかったのだ。

昨年、2歳に満たない女の子を連れて20代の母娘を保護した。「三段壁の絶壁のふちに立ち何度も飛び込もうとしたが、娘がママ怖いなあと言った。自分は死にたいけど、この子は死なせてもいいのか、私が死んだらこの子はどうやって生きていくのか、どうしていいかわからなくなった。」と話してくれた。この女性は生まれたときから乳児院で育てられ、両親の顔を知らないまま、孤児院、教護院で中学を卒業するまで育った。その後、社会に出たが仕事がないばかりか社会になじめず、寂しさから結婚と離婚を繰り返し、3人の男性との間に6人の子どもを出産、おなかには7人目がいた。結局自分と同じ境遇の子どもを増やしていく状況を作り出している自分に嫌気がさして死を考えたのだ。私にとって、この女性を責めるのは簡単なことだった。しかし、この女性は親に愛情を注がれ育てられた経験がないのだ。私は、彼女を責めることが

できなかった。味わっていないことや教わっていないことを自分で実践できるわけがないではないか。この女性は、うちにいる里子に感じる課題と同じ課題を抱えていた。ある時こんなことがあった。家族で食事をしていたのだが、私が里子に、その子の好きなものをたくさん食べさせようと皿に盛った。彼はそれを喜んで食べたのだが、その時、妻が何気なく「なんでおっちゃんがいっぱいのせたのか分かる？」と聞いた。すると彼は、「みんなが嫌いなものだから自分にたくさんくれたんやろ」と言ったのだ。私は愕然とした。親の愛情を受けずに育つと、人の愛情を察知できないのだ。だから、安心できない。いつも自分が中心で自分を見てほしいと思う。他人に求めていることがたくさんあるのに、求めたその相手を信用できない。要求と欠乏が募るばかりである。先の女性は、この子と同じ課題を色濃く持っていた。

現在、私たちは、自殺対策の活動を教育の分野に広げている。これが自殺を減らす解決の道になると痛感しているからだ。家庭的に厳しい環境にいる子どもたちを含め、義務教育期間内に、子どもたちに基礎学力と社会性を身に着けさせていく。夢や目標に向かっていく力を持たせると共に、さらに助けが必要な時に適切な方法で助けを求めることができる力を持たせたいと考えているのだ。自分を知り他者と共に生きる力、たとえ困難があろうとも助け合える仲間を持つ力を身につけている。そんな人間を育てていくことが根本的な自殺対策だと考えているのだ。

活動中にこんなことがあった。小学5年生の女子児童4人が1対3で喧嘩を始め、1人の児童が大人のところに泣きながら来たので、私は「間に入ってほしいのか」と声をかけた。しかし、この児童は「自分で話す」と言って、3人のところへ戻って約1時間4人での話し合いを持ったのだ。そこで、出てきた結論に私は驚いた。お互いの言い分については納得いかないところがある。しかし、自分たちがお互いに辛い気持ちになったことは分かった。やっぱり仲直りして一緒に遊ぼうというものだったのだ。もしも、私が間に入っていたら、お互いの言い分のある部分をお互いに譲歩させて、仲直りさせただろう。しかし、意見や考え方が違ってもお互いを認め一緒に遊ぶという結論は最高の結論ではないだろうか。この力が身につけば、自殺に至る経路に迷い込む可能性は限りなくなくなるのではないだろうか。

次に考えていることは、自殺したいとまで落ち込んでしまった人が、もう一度やり直していくために必要なものは何かということだ。今の今まで落ち込んでいた人が急に元気になることはありえない。どうしても時間がかかるのだ。1週間、2週間で足りるかどうか。1ヶ月、2ヶ月経っても、死にたいと思った気持ちは、何度となく再燃する。それを、抱えていた問題を解決していくことや、毎日の生活が保障されるなど、状況を良い方向へ変えていくことを同時に行なうことで、乗り越えてさせていく

のだ。とにかく時間がかかる。だから、その間の衣食住を提供する必要がある。就職するためにも住所や連絡先は必要だ。行政の援助を得るためには必ずしも住所がなくてはならないわけではないが、生活困窮者一時金や生活保護を受給するためには生活の場(実態)が必要だ。そして、就職面接一つとっても、だらしない服装で合格するわけがない。散髪だって大事なポイントだ。食べることは言うまでもない。しかし、自殺にまで追い込まれて孤立している人にそんな時間や場所、経済的な余裕はあるだろうか。結局のところ、誰かに助けてもらわなければ、やり直す時間も場所もない状況なのだ。家族や友人など、自分を丸抱えしてくれる人がいれば、やり直しやすいと思う。しかし、どうしても、家族や友人との関係が壊れているかなくなっているケースが増えているのだ。しかも、今はプライバシーや人権といった言葉によって地域の中でも他人のことに関わりを持つことが難しい風潮がある。地域のセーフティーネットは機能し辛くなっていると思う。町内会長も民生委員も福祉委員も学校の先生ですら各家庭に関わりを持ってないのだ。だから個々が孤立しやすくなる。死を選ばざるを得なくなる。

経済的な豊かさの陰で失われていったものがあると思う。収入さえあれば、自分ひとりで生きていけるのが今の社会。周囲と関わらなくても生活費に事欠かなければ誰にも迷惑かけずに生きていける。だから面倒で煩わしい人間関係は極力避けて、周囲との兼ね合いで我慢や忍耐をする必要もない自分だけの世界を作ることができる。醤油を隣に借りに行くような物がなかった時代、家族や隣近所と助け合って生きていかなければならなかった時代では考えられないことが今はできるのだ。しかし、それだけに人と人のつながりが希薄になり、経済的な躓きだけで社会的に孤立する人が増えている。そして、人と関わる力を持たない人を含んでおけるほど、周囲の人々も人と人のつながりを持っていないのだ。誰もが陥りやすい落とし穴がここにある。この点においては、自殺に到る道は他人事ではないと言わねばならない。

自殺者が立ち直るまでに必要なものは、時間と生活の場所、そして人の助けだ。しかし、この3つが当たり前で得られる社会ではなくなっている。そして、もしも力になりたいと思っている人がいても、その思いを行動に移すことが困難な世の中になっているということだ。

自殺したいと悩む多くの人が、電話をかけてきて、最初に言うのは「もうだれもおらへん。」「もう一人なんや。」「誰も悲しまへん。」「誰にも迷惑かけへん。」「最後に誰かの声を聞きたかった。」という人との関わりについての言及だ。それだけ、誰かの助けを求めているということだ。しかし、彼らは彼らのことばを聞いてくれる場所を失っている。私は、もう一度、彼らのことばを聞いてあげる必要があると思う。話せるようにしてあげる必要があると思う。初めから死にたくて死ぬ人はいない。死ぬしか

ない状況に陥っているから死を考える。生きる希望が見えてこない、絶望しているから死にたくなるのだ。そうすると、人は、もう自分の力では立ち直ることができない。その時、誰が側にいるか、どんな手が差し伸べられたかで、明暗が分かれると思う。人が一人自殺するまでの間には、一体何人の人との関わりがあったのだろうか。数え切れない人との関わりがあったはずなのに、どうしてもどこかで助けを得ることにならなかったのか。

直接的には、確かに彼らの問題であり、自業自得の結末といわざるを得ない面が必ずある。しかし同時に、彼らの生きる社会の一員である私たちが考えなければならない問題も確実に存在する。この両面を見ない限り、自殺問題は根本的な解決へと進んでいかない。

さて、次に考えたいことは、このような自殺を取り巻く個人や社会の問題に、行政はどのように対処しているのかという点である。社会福祉協議会が窓口になって、保証人なしで家賃や生活費を援助する貸付制度が開始されたが、成果が見えてくるのはこれからだろう。福祉課の窓口で相談をした場合、約5万円までの貸付制度があるが、これも民生委員の推薦や保証人が必要なため、ハードルが高い。法テラスも昨年来、利用者が急増し経済的に苦しい状況だと聞いた。詰まるところ、社会で行き詰まり、生きる場所を失った人や家族が最後の頼みの綱とするのは、生活保護しかないのが現状だ。しかし、この制度も経済的に限界が来ている。この制度は、社会のセーフティネットとして絶対に必要なものだが、これ以外に多様な、あるいは段階的なセーフティネットがないことが問題だと思う。例えば、生活保護の世帯割りを、共同生活に摘要するなど、国会で話し合ってもらうことはできないか。自殺で悩む一人一人に生活保護を摘要するよりも、やり直すための時間と場所を提供することに焦点を当て、少し不自由はあるが生活できる環境を提供する。私たちの活動では、10名が月20万円ほどで生活している。白浜町では約二人分の生活保護費だ。どうしても働けない人のためには全額保障し、まだ働ける人には、共同生活を通し自立を目指してもらおう。この方法は、社会でも理解されやすいのではないか。

話を戻すが、今現場では、自殺を水際で食い止めた後の対応をどうするかが問題となっている。生活保護か出てきたところに帰ってもらうかしかない地方自治体は予算に裏づけされた解決策を持たないまま、自殺を食い止めなければならないと喘いでいる。食い止めたいが、やり直しをさせるノウハウも場所も予算もないのだ。国の自殺対策基金が各都道府県に配られたが、それも3年という期限付き。だから、継続していく活動は、最後は民間頼みにならざるを得ないようだ。しかし、本来ならば、この大きなお金を動かせる時に、自立支援を行なう枠組みと方法を確立させるべきだ。何

度も言うが、一時的にでも自殺で悩む人を丸抱えして保護できる仕組みが必要だ。

私たちは、保護した後、雨風を凌げて、一日3回食事ができることだけを保障する。決して十分ではない。足りないものはたくさんあるが、就職に必要な援助はできる限り答える。先日は、死ぬつもりで義眼を捨てた男性の義眼を作るために14万円を費やした。就職面接で眼帯をしたままでは厳しいのだ。自立していくための援助にはお金を惜しまない。しかし、生活面では厳しいまま、自分のおかれている状況を受け入れてもらうのだ。付け加えるなら、この14万円は、本人には渡してはいない。病院までNPOスタッフが支払いに行ったのだ。どうしても大金を手にとると誘惑が大きいかからだ。途中で心変わりして14万円で別の道があるかもと実行に移されてしまう可能性があるということだ。運営資金は、支援してくださる方々一人一人の気持ちのこもったものだからこそ大切に使う必要がある。そして支援者の期待に応えなければならない。

私は任意団体を建て上げ活動報告を発行し始めた頃、起こった出来事をありのままに会報にして書き送った。その結果、当時の共同生活者が多くの問題を起こしたことから、多くの支援者が支援の打ち切りを伝えてきた。こんな人たちを助けたいとは思わないと。50人以上いた支援者は20数人になった。私は、共同生活を始めた人に必ずこの経験を話す。この活動が続けられるのは、多くの支援者が支えてくれているからであり、彼らの理解を無くしてしまう行動は慎むべきなのだ。タバコやお酒など嗜好品はできる限り自立まで慎むべきだ。自分で生活できない状況なのだから、収入は自分のお金として自由に使うことも控えるべきだ。自立を目指し貯蓄していくべきなのだ。そして少しでも早く自立する。この方向性を崩して人権や人道主義という思想だけで一時保護施設を運営することは非常に難しい。一時的な生活の場なのだから、不自由を感じる場所であるべきなのだ。

これは行政が行う場合も同じだ。税金を投入するわけだから、多くの人の税金が無駄に使われていると思わせてしまう方法は避けなければならない。行政を批判する民間団体はたくさんあるが、行政に協力を惜しまない民間団体は少ないのではないか。結局のところ批判されやすい立場の行政は、厳しくすれば厳しいと批判され、甘くすると甘いと言われるのだ。しかし、この多くの人の理解で成り立っているという運営方針は、誰もがわかりやすいのではないか。多くの人の理解と支援の下、助けられていることを利用者に分かってもらい、協力する民間団体にも理解してもらうのだ。自殺を減らすためには、悩んでいる人を助けるしかない。それには、時間もかかる、場所もある、多くの人の助け(理解)がいるのだ。

行政のために、多くの人の理解と支援以外に、一時保護施設を運営していくために必要なものをあげるなら、まず、強力なリーダーシップ。何があっても信念を貫ける

リーダーシップが求められる。そして、何でも受け入れられる度量と、だめなものだめと言える強さだ。次に必要なのは、そのリーダーシップを支える民間の理解と協力だ。いつもここに軋轢が生まれ、利用者に不信感を与え、利用者はこの軋轢をうまく利用する。最後は、経験していくことだ。理想論だけじゃない現実を目の当たりにする経験を積み重ねることで活動も施設も充実させていけるだろう。

2009年10月5日深夜0時29分。癌で入院していた男性が天に召された。彼は、10年前、三段壁で保護され、人生をやり直しこの日まで精一杯生きた。

三日間、トイレの水だけを飲んで死ぬことを考え、絶壁に座り続け、日焼けで唇がパンパンに腫れ上がり、体中が真っ赤に火傷している状態だった。死に切れず、しかし衰弱して動けず、失意の内にただ座り続けていたのだ。四日目の夜、観光客らしい数人の若い女の子の一人が、通り過ぎた後、戻ってきて、彼の前に立った。「馬鹿なこと考えたらあかんよ。死んだらあかんよ。」女性はそう言って2000円を手渡してくれたそうだ。彼は、翌朝、そのお金で、ご飯を食べ、うちに電話をしてきたのだ。それから9ヶ月で自立。3年前に倒れるまでホテルの警備員や掃除の仕事を続け、自立した生活を送った。3年前、脳梗塞で倒れてからは長期療養生活だったが、彼はその間も精一杯生きた。今年7月癌が見つかり、余命2週間と宣告された。しかし、それから10月までがんばったのだ。この数ヶ月、毎日のように二人で話していたのは「この10年よくがんばってこれた。生きてきてよかった」そして「10年前声をかけてくれた女性に感謝やなあ。」というものだった。死の縁で苦しんでいた彼に、声をかけられるだけの助けの手を差し伸べてくれた女性は、男性がその後送ったこの10年の歩みを知らない。しかし、この男性の人生を変えたのは、たった一度声をかけ、できる限りの助けを差し出したこの女性だったことは誰も否めない。この男性は9月には信仰告白に至り、病床洗礼を受け、天に帰る希望を持って死を迎え、この10年間、彼を見守り支えた教会の人々に斎場で見送られた。現在、この男性は、ご両親のお墓に埋葬されている。葬儀の一ヵ月後、男性の行方を知った妹さんから電話があり、翌日には御骨を引き取りに来てくれたのだ。最後の10年間が幸せな10年間だったと共に喜ぶことができた。逝く側も看取る側も納得して死を迎えられることがどれほどうれしいことか深く考えさせられたケースだった。

自殺問題は、多岐に渡る。一括りで論じることのできない現実がある。しかし、そのひとつひとつの現場には、はっきり見えている共通の必要がある。その必要とは、援助する側もされる側も、社会という「群れ」で生きる力を身に付けることではないか。時間のかかる作業だが、改めて、その対策を考えることが根本的な自殺対策ではないかと思う。